「ご退職に寄せて」

中村耕二先生から学ぶ英語教育

国際言語文化センター　吉田　桂子

中村耕二先生のご退職にあたり、2015年９月から2018年３月までという短い期間ではあるが、甲南大学国際言語文化センター英語専任教員として共に働く中で先生の授業に参加させていただく貴重な機会に恵まれたため、そこから学んだことをここに記す。

先生は、基礎英語Ｉという reading に重点を置いた授業があった頃から、教科書 *Beyond Language* や配布資料を読んでは自分の考えを英語で writing する授業を実践してこられた。*Beyond Language* は、異文化コミュニケーションのコンサルタントの経験もある TEFL/TESL（Teaching English as a Foreign/Second Language）の教員の著書である。この教科書の選択から、先生はこの授業において、英語を学ぶ真の目的はさまざまな違いを共通の言語で乗り越えた先にある深い相互理解にあることを学生に伝えようとしていることがうかがえる。先生のホームページに記載されているこの授業の目標を見ると、やはり language objectives と cross-cultural objectives の２つが明記されている。前者は、*The ultimate goal of the Kiso Reading class is to provide students with the reading skills and strategies through both intensive and extensive reading at a level of increased difficulty.* と記されており、精読･多読の両方を通して reading の力と方略を身につけることが示されている。同時に後者を以下のように説明している。*The cross-cultural objective is to provide an understanding of cultural diversity in a pluralistic/heterogeneous societies, fostering cultural sensitivity and cross-cultural literacy in communication.* このように文化的感受性や異文化リテラシーを高め、多元的な社会における文化の多様性を理解していくことを目指している。では学生はどのように文化的感受性やコミュニケーションにおける異文化リテラシーを身につけていくのか。教科書の冒頭部分に文化を氷山に例えた絵がある。水面上に現れている explicit culture として、言語、食べ物、容姿などがあるとともに、水面下に隠れている implicit culture として、コミュニケーションスタイル、価値観、感覚などがあることを示している。先生の授業は、この深層部分にも十分に焦点を当てながら、表層と深層の二つが切り離せないことを１年次に十分に実感させ、在学中や卒業後にも続く言語・文化についての真の学びを促す大きな基盤を築いている。そして、そういった表層・深層文化における違いを乗り越える鍵は、awareness（文化に対する問題意識）、respect（文化に

対する尊敬の念)、communication（コミュニケーション能力)、reconciliation（和解する能力）にあることを強調している。

授業で使われる配布資料には、主に２つの共通テーマがある。一つは、時事的な世界の変化である。ここ数年であれば、当時のオバマ大統領の広島でのスピーチ、Brexit についての英国民の意見などを記した英字新聞記事などである。学生はそのような記事を読んだ上で、自分の意見をエッセイとして表す課題が与えられる。例えば、実際のオバマ大統領の広島でのスピーチに関するエッセイ課題において、学生には、世界や日本の出来事に関する自分の意見を確立することと、coherent and cohesive paragraphs（一貫性・結束性のある段落）という英語の形式を習得することの両方が同時に要求された。このようなトレーニングは、先生の授業の枠を越え、同僚の教員にも大きな刺激となっている。「良かったら授業で使ってください。」と、新聞記事をコピーして朝一番に配布してくださることもしばしばあり、私も実際に授業で使用させていただくことがあった。配布資料に登場するもう一つのテーマは、普遍的なテーマ、平和である。先生のホームページにある自己紹介においても、*His major interest is the integration of global citizenship education for peace into EFL education in Japan, nurturing students' cultural literacy, cross-cultural literacy and global literacy.* と記されている。先生は特にノルウェーの平和学の第一人者であるヨハン・ガルトゥングが提唱した、戦争がない状態を示す消極的平和（Negative Peace）と、構造的暴力（貧困・抑圧・差別など）が無い状態を示す積極的平和（Positive Peace）という概念を取り上げている。毎年発表に行かれるオクスフォード大学の平和学会の資料も授業で配布している。その中で例えばアウンサンスーチーも、ビルマの伝統における平和は、暴力行為の終わりを意味するだけでなく、憎しみ、紛争、差別、不平等、貧困、機会の欠如を増長してしまう恐怖心の根本を断つことを意味する、と述べている。先生は、平和とは目標や最終的に達成される成果ではなく process であり、市民文化とは一人一人の平和の実践者の活動が集積するやはり process であると教えている。また先生は、日々のどのような小さな機会であってもその process を推し進めていくことが教育であるという強い信念を持っている。学生はそういった資料を読みながら、ガルトゥング、アウンサンスーチー、そして先生が考える２つの平和について自分自身でも考え、英語、特に EIL（English as an International Language）で意見を述べる力を磨いていくのである。

writing に関して、先生は Format for Summary and Opinion, Format for Essay という２種類のシートを作成・利用している。各シートの下部に、学生が writing をした後に文章の構造や内容を振り返るための Analytical Evaluation Criteria というチェックリストが付されている。これは、Clear Thesis Statement, Support to Thesis, Paragraph Coherence, Transition Devices, Sentence Structure, Clear Concluding Sentence, Clincher, Originality, Critical Thinking などが含まれているか課題提出前に自己点検できるリストである。

Grade には、AAA, AA, A, B++, B+, B, C, D, E という段階がある。この段階設定を見ても、学生の潜在的な高い writing 力を意識、期待、尊重し、そこからさらに技術を向上させていくことを目指していることがわかる。最後に Instructor's Comment という欄があり、先生がコメントをつけて返却する。エッセイは返却されて終わりではない。モデルとなるエッセイは、執筆者である学生の許可を得て授業中に配布され、時には授業のホームページに掲載される。また、授業中に次々に指名された学生が自分のエッセイを手に前に出て発表し、意見交換をすることもある。これは、writing を単に学生が思考を記号化して表す行為として捉えるのではなく、学生と教員、または学生同士の相互的かつ生産的なコミュニケーションの手段として考えたアプローチである。またこの活動は、教室内に学びの共同体を形成するという先生のポリシーの表れでもある。こういった process writing を重視し、とにかく授業では学生が常にあるトピックについて英語で読み、考え、書き、発表し、聞くという展開が繰り返されていくのである。先生は writing-reading-speaking connection という概念を用いており、多読がトピックに関する刺激をもたらし、学生の中にある背景知識を喚起し、writing や speaking をより向上させるという考えに基づいた指導を行っている。もちろん reading に重点は置かれているが、writing, speaking, listening を加えた４技能が統合された授業である。近年大学 IR（Institutional Research）コンソーシアムが実施している学生の学習到達度調査の結果から、本学でも１年次における writing 力のさらなる強化・向上が重点課題として取り上げられることとなった。結果として、長年先生が実践されてきた reading と writing の両方の力を同時に効果的に伸ばす教育へとカリキュラムが改正され、かつて reading に重点を置いていた基礎英語Ｉという科目は、College English Reading and Writing に名称・内容ともに変更された。

この２年半に、先生の College English Reading and Writing、英語科教育法Ｉ・II、Japan Studies という授業を見学させていただいた。上記はその１つ College English Reading and Writing の授業から学んだことを纏めたものであるが、どの授業も息つく暇もなく多くの教育的要素や活動が詰め込まれた授業であり、学生の思考が高度に active になる授業だと実感した。甲南大学国際言語文化センターの英語教育を創られた中村耕二先生の授業から直接学ばせていただいたことを胸に、真摯に英語教育に向き合っていきたい。

先生がいつも廊下の先の窓辺に置いてくださるお花